

平成15年度第4回日本生物物理学会運営委員会議事録（案）

日時：平成15年7月5日（土）13：00～

場所：東淀川勤労者センター第4会議室

出席者：柳田会長、児玉副会長、美宅副会長、石渡次期会長、有坂、入佐、上田、後藤、諏訪、永山、三木、薬師、山縣、各運営委員、川端北海道支部長、河合秘書

議長：児玉副会長

報告事項：

1 生物科学学会連合報告（石渡；報1）

標記の件に関し、石渡次期会長から資料のように報告があった。

①「生物学国際高等コンファレンス」の実現に関する要望書について

「生物学国際高等コンファレンス」は基礎生物学研究所を中心に、ゴードンやコールドスプリングハーバーに匹敵する国際的研究集会を目指すものであるが、この開催に関して、文科省に支援を要望することとなったが、生物物理学会として要望書に名前を連ねて提出されたことが報告された。

②研究体制に関する提言について

村松喬日本生化学会会長を中心にまとめられた「研究体制に関する提言」に、生物物理学会が発信者として名前を連ねたことが報告された。この提言の骨子は3つある。

1. 大学院生の経済支援について・・・大学院生は経済的に自立すべきである、など。
2. ポストポストドク問題（ポストドクター終了後の就職問題）について・・・就職情報の窓口のようなものを設置、転任すればするほど不利になる退職金制度の問題、など。
3. 科学研究費について・・・基盤研究(B), (C)の充実、年度を越えた使用、審査の問題、など。

2 会誌編集委員会報告（入佐；報2）

標記の件に関し、入佐委員から資料のように報告があった。

本委員会は2003年5月10日に行われた。特に「会誌に関する意見交換」に関して、会誌編集委員会と運営委員会の間での温度差が報告された。その中での意見を反映し、会誌に関する学会としての方針を会誌8月号に掲載する旨が報告された（報告4）。これは、美宅副会長と入佐委員の連盟で会誌に関する方針と現状を報告するものである。7月5日に行われた出版委員会での方針「印刷媒体は現状のままにする。一次論文は電子ジャーナルに組み込み、別雑誌としては発行しない。ただし、一次論文はオンラインのみとする。」を盛り込む予定。この会誌に掲載される方針に対し、年会時にアンケート方式で学会員から反響を伺う意見も会誌編集委員会ではあがったが、現時点では編集委員会において委員長からアンケート準備の指示は行なわれていない。

4 会誌に掲載される「電子ジャーナルについて」の原稿内容（入佐；報4）

標記の件に関し、入佐委員から資料のように報告があった。基本的な方針として以下の部

分が読み上げられた。「電子ジャーナル『生物物理』に関し、平成15年度第2回運営委員会において、次の方針が柳田会長から提案され議論されました。電子ジャーナルの特性を生かし、内容が執筆依頼したレビューのみという現状から、英文の査読論文（一次論文）を組み込み、議論されてきた「advances in biophysics」と統合し、電子ジャーナル『生物物理』として一本化し運営する。ただし、会誌編集委員の負担の増加を避けるため、・・・」。加えて、費用に関する内容、他の問題点などが掲載される。また、その後の議論から、報告3-2に基づいた内容「印刷媒体の形態は変化しない、費用はあまり増えない、などの具体的な現状（中間報告）」を盛り込むことになった。いくつかの意見が出され、この記事が中間報告であると明記し、できる限りの現状を記すこととなった。

3-1 J-STAGE2 説明会報告（入佐；報3）

標記の件に関し、入佐委員から資料のように報告があった。J-STAGE は資料のように多くの問題（例えば、約束されていた電子化作業の技術的サポートが撤回されている、など）を抱えてはいるものの、以下の2つの理由により、継続して利用する旨が報告された。

①J-STAGE に対する使用料が無料（少なくとも現在）

②検索可能（海外の検索サイトとのリンク）

3-2 出版委員会での会誌電子化の方針に関しての報告

引き続き、7月5日に行われた出版委員会での会誌電子化の方針に関して報告が入佐委員からあった（運営委員会後、出版委員会メンバーに配られた公式議事録あり）。

①印刷媒体『生物物理』の形態（ページ数など）は、現状のまま。このことは従来議論されてきた点に関して大きな解決となる。

②会計の問題が解決できれば、印刷業務をサイペック社から中西印刷に移行することによって、スムーズな電子化が期待できる。従来の印刷・製本・オンラインジャーナルの制作に関する試算ではサイペック社よりも安い。また、中西印刷は J.Biochemistry（日本生化学会）など、多くの英文誌・和文誌を手がけている。J-stage との対応もできている。

③電子ジャーナルの方針は従来のレビュー誌に一次論文を上乗せすることに変化はない。また、組織を構築する。特に一次論文に関しての editorial board をつくる。その組織は印刷媒体『生物物理』のそれとは基本的に独立したものとして考える。ただし、雑誌そのものは独立しておらず、従来の『生物物理』に一次論文が加わったものとする。その理由は、「一次論文は場合によってはゼロでも良いとする。」ため、独立した雑誌を運営するわけではないためである。また、速報性も考慮し、すみやかに公表できる電子ジャーナルを目指す。もう一つ、学会が英文誌を持つことによって海外や他学会に対しアピールすることができる。以上の報告に付け加え、柳田会長から電子ジャーナルワーキンググループにおいて、電子ジャーナルの組織づくり（組織長も含む）、印刷業者切り替えに関する詳細を検討（再来年の1月を目標として）することが報告された。

永山委員：「一次論文は英語なのか？」

柳田会長：「その通り」

永山委員：「英文誌の名前は？」

入佐委員：「すでに”生物物理”の英文名が'Biophysics'であるのでそれを踏襲する予定であるが変更も可能だと思われる」

永山委員：「仕事が増えているのに料金が同じというのはうまい話すぎないか？」

美宅副会長：「中西印刷はすでにある程度の開発に投資を行い、ノウハウを持ってい

るためではないか」

柳田会長：「いずれにせよ、学会として英文誌を持っていないと色々な局面でネガティブに働くので持つべきだと考えている」

児玉副会長から、「advance in biophysics」という名前が継承されないなら、索引体制を整えるべきではないかという意見が出された。この問題はWGで議論されることとなる。環太平洋圏でのジャーナルに関しては、リンクを張ることによって対応できるのではないかと、石渡次期会長と永山委員、柳田会長とで議論された。運営委員会では、この出版委員会で提案された電子ジャーナルの方針を承認し、支持することとなった。具体的には、2005年度の予算に盛り込み、2005年の1月を1次論文を組み込んだオンラインジャーナル開始の目標とする。（学会では会計年度の開始は1月）今年9月の総会で審議される来年度予算案には関係しない。

5 平成15年度年会準備状況（美宅；報5）

標記の件に関し、美宅副会長から資料のように報告があった。

- ・平成15年度年会は、9月23日～26日の4日間（生物物理学会としては25日までの3日間）行われる。初日（23日）に（市民のための公開シンポジウムも含む）多くのシンポジウムが開かれる。

- ・「男女共同参画を考える会」が開かれる。

- ・両学会合わせて、1200弱の演題がポスター発表を行う。（ポスターは貼りっぱなし）

- ・24日（2日目）午前中にポスター討論が行われる（プレビューは無い）。

- ・24日午後に、ポスターセレクションシンポジウムと合同シンポジウムが行われる。

- ・合同懇親会も24日に行われる。

- ・25日（3日目）午前中にもポスター討論、午後に生物物理学会のシンポジウムが行われる。

- ・ランチョンセミナーに関して資料の変更があった。23日のアルファメド（株）と25日の（株）ニコンとが入れ替え、また、23日の旧運営委員会を、イニシアムのランチョンセミナーと入れ替える。次に、合同年会の特別プログラム集についての報告と、生物物理学会のシンポジウムの報告があった。ランチョンセミナー（7演題）、機器展示、予稿集の広告により500万円弱の収入が見込まれる。予稿集の費用を年会予算に計上する意向が述べられた。なお、新潟県からは上限として総運営費の1/3、あるいは700万円の補助が約束されている。石渡次期会長から参加費について質問があったが、どちらかで参加費を納入しておけば両学会に参加できるという返答があった。

児玉副会長からは、「参加費を納めないで参加する会員がいる。」ことが指摘された。

柳田会長は、「‘ひやかし’でのぞいてみるという人が入ってきても良いではないか、という考えもある」ことが述べられた。ただ、児玉副会長の指摘された問題は、会員以外の未納者ではなく、会員が参加費を納めないことである。いくつかの議論があったが、新潟大会では（神経化学会とのコンセンサスという問題もあるが）入口に監視役を立てることなどを準備委員会で検討することになった。

6 平成16年度年会準備状況（三木；報6）

標記の件に関し、三木委員から資料のように報告があった。

- ・ 12月13日－15日に京都国際会議場で行われる。
- ・ シンポジウム4会場、ポスター、展示会場を用意し、一日あたりポスターは300演題となる予定。
- ・ 会場費は約900万円。懇親会は500名の会場であるが、参加人数によっては庭をあわせて対応することも可能。
- ・ 経費を充実させるために12のランチオンセミナーを見込んでいる。

さらに、新しい試みとして、準備委員会からの提案があった。それは、他の学術集会（特に開催資金を確保している集会）との共催である。柳田会長と石渡次期会長からは、ヒューマンサイエンスフロンティアのワークショップ（外国人講師を招待）との共催はどうかという案が出された。いくつかの意見が、柳田会長、石渡次期会長、永山委員から出された。その一つに、「ランチオンセミナーのアカデミック版と考えてはどうか？」という意見があり、生物物理学会としてもその学術集会にとっても、新しい研究分野との出会いが期待される。そういう意味では、生物物理に関連しない分野でも良いのではないかという意見も出てきた。いずれにしても、生物物理学会大会の一部として、その学術集会が行われることが前提条件となることが確認された。

柳田会長：「準備委員会の方で具体案を用意してもらった方が判断しやすい」

永山委員：「ヒューマンサイエンスフロンティアの話があったけれども、国際化を是非進めてほしい」

三木委員からは、シンポジウムの一環、あるいはランチオンセミナーの変形という形で、共催可能であると捉えて、準備委員会に持ち帰って議論したいという旨が述べられた。企画の方からも、シンポジウムに関して準備委員会枠というものを1～2テーマ設定したいとの旨が述べられた。

7 平成16・17年度委員候補者補充選挙結果報告（児玉；報7）

標記の件に関し、児玉副会長から資料のように報告があった。4月22日に開票された委員候補者補充選挙結果が資料のように報告された。結果として、会員からの推薦が24名、補充による推薦者が68名で、計92名の候補者が選ばれた。

8 平成16・17年度学会委員選挙結果報告（児玉；報8）

標記の件に関し、児玉副会長から資料のように報告があった。6月26日に開票された委員選挙結果が、資料（以下に抜粋）のように上位25名が選出されたことが報告された。

若杉桂輔（京大・工）、難波啓一（阪大・生命）、石島秋彦（名大・工）、田之倉優（東大・農）、武藤悦子（理研）、山懸ゆり子（熊本大・薬）、後藤祐児（阪大・蛋白研）、楠見明弘（名大・理）、安永卓生（九工大・情報）、佐甲靖志（阪大・医）、中川敦史（阪大・蛋白研）、藤吉好則（京大・理）、宇高恵子（高知医大・免疫）、田中勲（北大・理）、樋口秀男（東北大・工）、吉川研一（京大）、中迫雅由（慶應大・理工）、相田美砂子（広島大）、片岡幹雄（奈良先端大）、桑島邦博（東大・理）、安藤敏夫（金沢大・理）、金城政孝（北大）、吉田賢右（東工大・資源化）、上村慎治（東大・総合）、野地博行（東大・生産研）

9 平成16年度科研費審査委員候補者選挙結果報告（児玉；報9）

阿久津委員、佐甲委員と児玉副会長により、会員からの投票から候補者を選び出し、その母数から昨年行われた科研費アンケートに基づいて、分類を行い、資料（以下に抜粋）のように候補者を選出したことが報告された。なお、平成16年度の審査員として内定している場合を除いている。児玉副会長からは投票数が少ないために、選出するのが困難で、投票絶対数を上げる努力をする必要がある旨が報告された。この一覧が研連に対して推薦される。

平成16年度科研費審査委員候補者一覧

1 段、応用ゲノム：1 城所俊一 2 伏見譲；基礎ゲノム：1 黒田裕；進化生物学：1 山岸明彦；生物情報科学：1 北尾彰朗 2 太田元規；生命体システム情報：1 川戸佳 2 輪湖博；農業情報工学：1 宮本宏 2 入佐正幸；生物物理：1 阿久津秀雄 2 有坂文雄 3 田中勲 4 大澤研二 5 三室守 6 安藤敏夫 7 徳永万喜洋 8 南後守 9 桐野豊 10 熊谷泉 11 白川昌宏 12 今元泰 13 林文夫；構造生物化学：1 豊島近；生物分子科学：1 難波啓一 2 加茂直樹 3 前田雄一郎 4 徳永史生；生物物理・化学物理 1 桑島邦博 2 木原裕 3 児玉孝雄；生体関連化学：1 中川敦史 2 箱嶋敏雄 3 嶋田一夫；機能生物化学：1 伊藤繁 2 鏝木基成；ナノ・マイクロ科学：1 吉田賢右 2 石島秋彦。2 段、情報学：1 笹井理生 2 諏訪牧子；ナノ・マイクロ：1 木下一彦 2 猪飼篤；ゲノム科学：1 中村春木 2 美宅成樹；生物科学：1 月原富武 2 永山国昭 3 津田基之

10 秘書給与について（児玉；報10）

標記の件に関し、児玉副会長から資料のように報告があった。また、柳田会長より、この資料の額には住宅費が含まれている旨が述べられた。ほとんどの額が大学での日々雇用の額を参考に決めた旨が補足された。

11 会計監査報告（柳田；報11）

標記の件に関し、柳田会長から資料のように報告があった。

議 題

1 平成15年度中間決算報告（有坂；議1）

2 平成16年度予算案（有坂；議2）

標記の件に関し、（阿久津委員は欠席のため）有坂委員より資料に基づいて説明があった。ところが、ほとんどの委員が混乱してしまったので、わかりやすい書式でもう一度作成し、電子メールでの持ち回りで検討することとなった。次回の運営委員会で承認する予定。

3 平成17年度年会開催候補地（柳田）

標記の件に関し、柳田会長、上田委員、川端委員より説明があった。京都の次、平成17年度年会は北海道で開催されることが決まった。

4 年会における液晶プロジェクターの使用について（児玉；議4）

標記の件に関し、児玉副会長より資料に基づいて説明があった。一般会員から、年会でのプロジェクター使用に関して、不公平さ・不平等さを感じる旨が児玉副会長に伝えられて

いた。いくつかの議論があり、このような意見を真摯に受け止め、学会実行員会、学会準備委員会で議論し、検討することとなった。

5 男女共同参画アンケート実施について（児玉；議5）

標記の件に関し、児玉副会長より資料に基づいて説明があった。20以上の機関に所属する15万名強（重複あり）の対象に対して、Web または紙によるアンケートを行う。その際、生物物理学会の会員に電子メールを用いて通知をすべきかどうかが議題となる。すでに運営委員会ではメーリングリストの使用はきわめて限定された目的にのみ使用することが決まっている。後藤委員によると、内容は、2枚程度で短時間に答えられるようになっており、男性・女性ともに答えられる内容となっている。紙による通知かメールによる通知かは児玉副会長の判断にゆだねることとなったが、生物物理学会はアンケートに参加する。

6 会長による委員指名について（石渡；議6）

標記の件に関し、石渡次期会長より資料に基づいて説明があった。石渡次期会長は、「会長の指名」により、委員の追加を希望しているが、その人物は1期前に連続2期で選出されている。日本生物物理学会細則第18条には、「会長は、新委員の一割以内で委員を追加することができる。」と記されている。しかしながら、その次の第19条には「連続2期4年選出された委員はその後1期2年間選出されることはできない。」とあるため、連続2期選出された委員は会長の指名であっても委員になれないと解釈できるし、会長の指名は選出とは異なるため、第18条と第19条は独立した条項であると解釈もできる。なお、第18条は前後（第17―20条）に、委員の選出に関する事項が並んでおり、やはり選出に関する条項であると解釈した方が良さそうである。そこで、運営委員会での議題とし、議論することとなった。そのポイントは、

- ① 1期前に連続2期選出された委員を会長指名で委員にできるかどうか？
 - ② 第18条を第20条の後に入れかえ、第18条を選出とは独立したものにする。
- ただし、その場合は総会での是非を問わなければならない。

いくつかの議論が上田委員、柳田会長、永山委員から出され、細則の変更は行わず、上記の?の問題も否決することとなった。石渡次期会長は、選挙管理委員会など委員外からの援助が可能な方法で実質的援助を求めることとなった。

7 学会ホームページサーバ、ネームサーバ、メールサーバのプロアクティブへの外注について（入佐；議7）

8 プロアクティブの会員情報システム（MMB）の採否について（入佐；議8）

標記の件に関し、入佐委員より資料に基づいて説明があった。将来（あるいは現在）、会誌・ホームページ・会員情報の電子化には、個人情報管理や会計、不正アクセス等々、法的な問題も含まれるため、ボランティアで運営するには困難であると言わざるをえない。現在、学会のホームページサーバ、ネームサーバ、メールサーバの管理・運営は、入佐委員の研究室のサーバでボランティアベースで行われている。ここでは、その業務の外注を議論する。例えば、プロアクティブ社であれば、ホームページ管理に年間60万円必要で、メーリングリストではメールごとに2万円かかる。一方、オンラインアンケートは、一回あたり100万円となる。現在、学会員のメールアドレスなどの情報を管理しているのは、学会事務センターのみである。変更があった場合、生物物理学会では、フロッピーディスク

で送られてくる更新情報を、手作業で入力しなければならない。そこで、学会事務センターとは独立に、学会員の情報を二重に管理（外注）して、生物学会として情報の管理システムを構築してはどうか、というのがもう一つの議題となる。具体的には、プロアクティブの場合、年間30万円必要となる。また、外注先は報告事項3-2にあるように、中西印刷も可能である（費用は未調査）。この業務を外注した場合、ホームページ上で会員情報の管理はこの外注業者となり、学会事務センターにはこの外注先から会員情報が送られることになる。学会事務センターは会計管理（個々の学会員からは、会費の徴収）を中心に業務を委託する、あるいは、学会事務センターに委託している業務すべてを外注業者に移転することも可能（少なくとも、中西印刷なら可能）。ただし、今回の提案は、学会事務センターとは独立で二重に会員情報管理の電子システムを外注して構築したいということに限定している。

永山委員：「今はそれで良いとして、将来的には一本化すべきでは？」

石渡次期会長：「現状では、中西印刷よりも学会事務センターの方が安心だと思われる。

（だから、ある部分では外注で、ある部分では学会事務センターで、という振り分けを行う。）」

ホームページや電子管理システムには年間約100万円かかる。法的な問題もあり、安心して運営するにはこれくらいが必要となる。美宅委員からは、「いずれにしても、電子化などの移行には時間がかかるので、入佐委員の後任には、オンライン化、電子化に長けている人が必要なのではないか」という意見が出され、その必要性が議論された。少なくとも、外注先を中西印刷にすべきかどうかは調査し直して、判断しなければならない。

電子ジャーナルのWGの長を兼ねる美宅委員：「近日中に京都に行くので、中西印刷と話をするつもりである。」

有坂委員：「収入を増やすことを考えなければならないのではないかな？」

永山委員：「法人化のための特別会計（すでに法人化は断念）を電子化の予算委に充ててよいのでは？」

有坂委員：「一過的にかかる費用ならばよいとしても、毎年かかるとなると問題。やはり、現状をあまり越えないようにしてもらいたい。」

運営委員会では年間100万円という額を電子化（学会ホームページサーバ、ネームサーバ、メールサーバの管理等）に充てることを承認し、電子ジャーナルGWを中心に検討を進めることとなった。最後に、入佐委員から外注への移行前に現在使用中のサーバが故障した場合、発生する復旧費（100万円単位）を求められた。

9. 第15回 IUPAB Congress への招待後援者の推薦（永山；試料あり）

表記の件に関して永山委員より資料のように議題があがった。第15回 IUPAB Congress (International Union for Pure and Applied Biophysics Congress) は、フランス Montpellier で、2004年8月27日-9月1日の日程で EBSA (European Biophysical Society Association) との共催で行われるが、その招待講演者の推薦に関して、学術会議の生物物理研連の郷信広会長より依頼があった。自国の研究者だけを選出しない、という推薦の条件もある。来年の1月までにノミネートしてもらいたい。永山委員はすでに、生物学会として対応してほしい旨を柳田会長に依頼している。今回の永山委員からの提案は、学会の専門委員会を中心に、国際的に候補者の推薦を募り、学会として候補者の推薦を行ってほしいというものである。時間としては、新潟の年会までにまとめてほしい。

児玉副会長：「永山委員から、各専門委員会に依頼するのがよいのではないかな？」

永山委員：「より絞られた形で受け取りたい。（なぜなら、推薦理由書、アピールポイントなどを添付して提出するため。）」

柳田会長：「シンポジウムの内容は決まっているのか？」

永山委員：「決まっているので、シンポジウム数の内容と人数を含めて、各専門委員に手紙を用意することはできる。ただし、運営委員会を通して絞り込んでもらいたい。」

柳田会長：「各専門委員に絞り込んでもらってはどうか？」

児玉副会長：「各専門委員会にはまず候補者をあげてもらって、そのリスト（順位付き）からもう一度、各専門委員に絞り込んでもらってはどうか？」

永山委員：「そうやってある程度、絞ったあとで、運営委員会で最終的に決定するということでどうか？」

以上のような議論の結果、各専門委員による2回の選出の後で、最終的に運営委員会で決定するという方向で進めることとなった。

10 その他

その他の報告事項・議題は得になかった。

以上

議事録作製：薬師寿治